

第5回ESD・社会科理論研究会概要報告

- ◇開催日時 平成29年2月8日(水)19時～22時
- ◇会場 中澤研究室 (ESD研究室)
- ◇参加者 河野(富雄第三)、中澤哲(平群北)、新宮(平城)、島(郡山西)、中澤
- ◇内容

「フレーベルの教育原理」

- ・フレーベル(1782-1852)の教育原理とデューイの教育実践には重複する部分がある。

フレーベルの教育原理

①学校の第一の仕事は、協同的・相互扶助的な生活の仕方について子どもたちを訓練しようとする事

→協働的行動力の育成

②すべての教育活動の第一の根源は、子どもの諸々の本能的・衝動的な態度及び活動に存すること

→コミュニケーション、製作の本能、探究の本能、表現的衝動

③これらの個人的な傾向並びに活動は、…成熟した社会の典型的な営為および仕事を子どもの段階において再現することを意味するものであること。子ども

は生産と創造的な仕事(体験)を通じて価値ある知識を獲得し、確保するもの



- ・フレーベルの教育原理すべてが有用なものではなく、変更も必要。
- ・遊戯では動作や遊具に注目するのではなく、子どもの心理的態度に着目すべきである。
→授業では、子どもの思考の流れを把握して、子どもの意見が絡むような授業をする。
- ・心理学の発達により、フレーベルの教育原理を変更していくべきものであろう。遊戯そのものに固執することには意味はない。それがもつ本質的な意味こそ大切である。
- ・当時のドイツの社会情勢と幼稚園の自由な協同的な社会生活とは乖離があった。今なら、社会生活を取り入れて教育できる。
- ・教材は、事情の許す限り「現実的なもの」であり、直接的な、かつ率直なものでなければならない。
- ・子どもによって再現された現実は、できるかぎり身近な、直接的な、そして現実的な性質のものでなければならない。→言葉のうえで理解しているだけのもので終わらせない。具体的な事実の再現を要求することで、事実即知識を獲得させることになる。
- ・教材は現実的なものでなければならない。抽象的な話込みは子どもの探究意欲を減退させる。
- ・生活は多様な側面がある教材である。また、それぞれの事物の連続性に注目させ、相互に関連させて、まとまりのあるものとする。構造化された知識を獲得すること。
- ・子ども自身の衝動を糸口とすること(導入の工夫)
- ・より高い段階において終結させること(対話の必要性)
- ・模範は子どもの思考を限定することもある。前年度の子どもの作品を紹介することで、多様なものに気づく。

- ・子どもへの支援は、子どもの成長を助長する要因として作用するものでないといけない。
- ・子どもの思考の流れを把握し、支援すること。
- ・指図の連発による指導は、子どもの統御する力を減退させている。

次回は、3月7日（火）19時～
担当は、中澤哲先生